巻頭言

山梨から発信する看護

山梨大学看護学会誌編集委員長　**佐藤みつ子**

山梨大学看護学会誌は，2002年に第1巻1号を発行し,7年目(7巻1号)になります。これまで(学会誌の発刊を中止することなく)，継続してこれたのも皆様のご協力があったからと思います。山梨大学看護学会は，病院看護部の看護師と看護学科の教員が協力し合い2000年に設立し，その後，学会誌を創刊しました。このように，病院看護部と看護学科が共同で看護学会を開催し，学会誌まで発刊しているのは，全国的にも珍しく貴重なことであり，山梨大学の誇りに思えることだと思います。

山梨大学看護学会誌は，創刊当初から病院の看護師および大学院生や教員の論文発表の場としてだけでなく，山梨から全国へ「新しい看護を発信する」という高い志を持ち看護の質を向上させるという目的がありました。しかし看護学会誌の発刊当初は，投稿原稿が少なく，継続が心配されましたが，その後コンスタントに投稿があり，順調に発刊でき編集委員のひとりとして喜ばしいことです。

看護研究は，これまで経験的に得ていた知識やカン・コツで経験的に実践した看護を解明し，新しい知見を得，科学的な根拠のある知識を集積していくために必要になります。また誰が実践しても同じような結果が得られる再現性のある看護を発見し，提供するために必要なのだと思います。これは，新人の看護師であっても，ベテランといわれるような看護師であっても同質の看護が提供することを意味し，「経験主義の看護」あるいは「職人的な看護」から脱却することにもなります。看護研究の積み重ねこそ，実践科学といわれるゆえんの看護の発展につながると思います。さらに看護研究は，得られた結果を看護実践に生かし，成果が実感できれば看護師の看護への自信となり，看護専門職者としてのキャリアアップにもなると思います。

山梨大学看護学会を設立し，学会誌を発行後，会員皆様の看護研究への取り組みが活発になり，他看護学会への発表も増えており，看護の質の向上に多少なりとも貢献しているのではないかと思います。

看護界は，近年，少子・高齢化，医療の高度化，入院や在宅医療の需要の増大等を踏まえ，資質の高い看護者を育成するための看護基礎教育の高等教育化が進められています。このことは，医療が高度化しチーム医療が重視され，他の専門職との連携･協働が求められているからと思います。チーム医療の中で看護師が専門職者として独自に，しかも，科学的根拠をもって発言ができるようになる必要があります。そのためにも，看護研究をますます盛んにすることが不可欠だと思います。

山梨大学看護学会，学会誌が，皆様の身近なものとして，積極的に投稿していただき，学会当初の山梨から全国へ「新しい看護を発信する」という志を貫き，学会が，これからますます看護の発展に寄与することを願っています。